

看護系大学における災害看護教育

－宿泊による授業形態を体験した学生の学びから教育方法を検討する－

澤田 由美*・古城 幸子・中山 亜弓・柘野 浩子

新見公立大学看護学部

(2015年11月18日受理)

本学では、救命医療教育の基礎的事項を学ぶ教育カリキュラムとして『救命救急医療論』を開講している。本稿では、2012年から実施している授業の中の災害看護領域を紹介し、宿泊による授業形態の効果を検討した結果を述べる。

学生たちは宿泊を伴う集中講義であること、演習を伴うことに戸惑い、集団生活で発生する困難を体験していたが、集中して学べる環境と、未経験の被災日をイメージできる視聴覚教材の工夫により、災害看護に必要な技術を学ぶ際のモチベーションが保たれ、授業に対し真剣に向き合っていた。また、災害救護の専門家による救護活動の体験談からは、真剣さや緊張感、厳しさなどを学び、災害看護への興味・関心をもつ動機づけとなっていた。

日常から離れた環境に伴う困難はあるが、災害時に発揮できる知識や技術を集中して学ぶ授業形態は、授業目的の達成に効果的であることが明らかになった。

(キーワード) 看護基礎教育, 災害看護, 教育方法

はじめに

日本は大陸プレートと海洋プレートが複雑にぶつかり合う場所に位置しているため、地震活動が活発であり、近年は大きな災害が頻発している。1993年の北海道南西沖地震、1995年の阪神淡路大震災、2004年の新潟県中越地震と犠牲者が発生する震災が続き、2011年の東日本大震災では、死者15890人、行方不明者は2589人(2015年2月末現在)、震災直後の避難者は40万人以上と報告されている。このような時代において、日本の将来を担う看護職の養成においても、災害医療に関する教育の必要性が高まり、看護基礎教育から災害看護に必要な知識・技術・態度の育成に関わる様々な取り組みを行っている。

看護基礎教育課程は、『保健師助産師看護師学校養成所指定規則』を、社会の要請に沿いながらカリキュラム改正している。2008年4月に改正された新カリキュラムでは、臨床実践に近い形で学習し、知識・技術を統合させるため、新たに統合分野として『看護の統合と実践』が設けられた。『看護の統合と実践』の骨子には、①チーム医療及び他職種との協働における看護師の役割の理解、②マネージメント能力や、医療安全の基礎的知識の習得、③災害直後から支援できる看護の基礎的知識の理解の3点が盛り込まれ、それまでは教育施設ごとに実施されていた『災害看護』が一つの科目として位置づけられた。

本稿では、本学で開講している災害看護に関わる科目である『救命救急医療論』の概要を述べ、災害医療体制づくりに必要な基礎的知識と医療活動に必要な知識・技術・態度を習得することを目的とした内容や、体験型実践演習としての宿泊による授業方法を紹介し、学生の学びの内容から今後の課題を検討した過程を論じる。

1. 本学が考える災害救護教育

1) 授業の骨子

日本看護協会は、災害看護を「災害時に私たち看護に携わる者が、知識や技術を駆使し、他の専門分野の人々との協力のもとに、生命や健康生活への被害を少なくするための活動を展開すること」と定義している¹⁾。

災害医療には、①限られた資源で最大多数に最善を尽くす、②救命の可能性の高い傷病者を優先する、③災害弱者を優先する、④軽傷病者を除外するという原則がある。災害看護の特殊性としては、非常事態であること、人的・物的資源が不足している混乱の中で行われる看護活動であること、災害の種類と規模、被災地の特殊性、時期、活動の場による違いがあることが挙げられる。そのため、人的・物的に制限された環境下における活動であり、看護実践能力のみならず臨機応変に対応できる柔軟性、極限状態に追い込まれている被災者との援助的な

*連絡先：澤田由美 新見公立大学看護学部 718-8585 新見市西方1263-2

人間関係を築く能力が必要とされる。以上のことから、看護実践能力を高め、専門職としての人材育成に関わる重要な“看護の基盤”の一つであるといわれている²⁾。

災害時における看護の役割には①健康上の問題をもつことになった被災者の救命と、疾病の治癒促進への援助と療養環境の整備、②生活環境の整備と健康の保持、③生活の援助活動、④健康障害による苦痛緩和、⑤自立的復興可能な支援、⑥平時の防災力を備える支援の視点が網羅される必要がある³⁾。また、高齢者、母子などすべての発達段階になる人を対象とし、また、慢性疾患患者、精神疾患患者など、様々な疾患を抱えている人も対象としている。

資機材や人材が潤沢にある平常時と異なる医療環境を学び、緊急時に対応できる技術を習得することで、災害に関する看護独自の知識や技術を体系的かつ柔軟に用いるとともに、他の専門分野と協力して、災害の及ぼす生命や健康生活への被害を極力少なくする活動を展開する⁴⁾という、災害時における看護の役割が考えられるよう、本学では授業は講義だけではなく、実践さながらのシミュレーション演習を取り入れた内容で構築している。

看護基礎教育終了時における基礎能力の獲得を目的としたコアコンピテンシーは、兵庫県立大学モデルを参考に、基礎知識、援助活動に必要な能力の習得を中心に構築している（図1）。実践を想定した状況の把握、アセスメント、必要な看護活動、倫理的配慮に関する基礎知識は、実際に災害救護活動に就いている経験者からも講義を聴き、シミュレーション、演習、評価までの一連の過程を集中授業形式で行うことで、学生の関心を深めている。

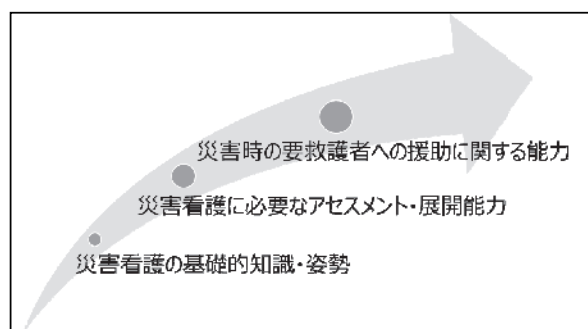


図1 看護基礎教育終了時における災害看護コアコンピテンシー

2) 『救命救急医療論』の授業構成

災害看護では、人間を取り巻く地球環境から、社会構造、人間関係、地域との関係が重要な因子と考える。また、災害の起こり方や原因、心の健康問題、人間関係の希薄さなど、様々な要因が災害時の現象を複雑にし、被災者のニーズを多様化させている⁵⁾といわれている。災害看護の視点は、単に知識・技術の習得のみならず、「そこに暮らす人間の生命と生活を守る」ことにあると考え

る。以上の視点から、『救命救急医療論』は、「救命救急」と「災害看護」の2領域で構成し、「災害看護」は以下の5項目⁵⁾を目標に構築している。

- ①学生に資源や人材が潤沢にある平常時と異なる医療環境を学ぶ。
- ②緊急時に対応できる技術を習得する。
- ③災害に関する看護独自の知識や技術を体系的かつ柔軟に用いる。
- ④チームの凝集性を高め、リーダーからの指示命令系統を順守し、メンバーの一員としての役割を意識しながら行動を考える。
- ⑤他の専門機関と協力し、災害の及ぼす生命や健康生活への被害を極力少なくするための看護の役割を考える。

「災害看護」は、災害医療体制づくりに必要な基礎的知識と医療活動に必要な知識・技術・態度を習得することを授業目的とし、必修科目、2単位24時間で展開、2年次後期に3日間の宿泊型授業として開講している（表1）。災害の概念、危機管理の指標、災害の定義、災害時の支援体制、災害サイクルと医療の変化、災害時の看護の役割、医療機関におけるトリアージ、災害に伴う医療機関の混乱、避難所での問題、赤十字と災害救護、心のケアなどは授業前半に講義形式で学び、スキルトレーニング、トリアージ、災害看護技術は実践演習形式で学べるようにしている。

表1 救命救急医療論の構成

授業科目 / 講義目的	時間	単位
災害看護	24	2
・災害医療体制づくりに必要な基礎的知識と医療活動に必要な判断力・行動力・協調性・積極性等を学ぶ。		
・災害看護の概念と構造、災害と健康と看護等を学ぶ。		
・災害時の医療、トリアージと救急看護、心理的障害と回復過程、災害医療援助活動の実際を学ぶ。		
救命救急	6	
・救急医療に必要な基礎的知識を学ぶ		
・一次救命処置に必要な技術を学ぶ		

宿泊は県内にある公共施設を使用している。公的な施設を活用することで、経費の節約と安全性の確保が可能となる。施設は市内から離れ、周囲を山に囲まれた自然豊かな環境にある。他団体も利用するため、起床時間や食事、入浴時間などの日課は細かく定められている。通常の生活のように自由に過ごす時間がない状況に加え、研修中は一人になる空間がなく、学生が普段生活している環境とは全く異なる生活空間での3日間となる。また、テレビやパソコンは使用できず、携帯電話も電波が微弱なため思うように使えない環境は、学生にとってかなり

制限された印象を受けたようであった。このような環境を敢えて設定した目的は以下の通りである。

- ① 日常の環境を離れ制限のある共同生活を体験することで、災害時の状況を理解する。
- ② 集団生活を体験することで、チームワークを学ぶ機会とする。
- ③ 講義時間外の活用が可能となり、学生が主体的にグループワークや課題演習に取り組みやすい環境が確保できる。

これらの4項目を達成するために、授業は講義だけではなく実践さながらのシミュレーション演習を取り入れた内容とした。

3) 「災害看護」の授業展開

災害サイクルに応じた看護活動は、表2の通りである。災害サイクルによって、被災者や地域住民のニーズは刻々と変化する。救護に当たる看護師には、臨機応変で柔軟な対応と、限られた資源のなかで工夫しながら活動できる能力が必要とされる。被災者を主体とし、心身共に健康となる援助⁶⁾につながる支援活動を考え、実践できるよう、授業では、急性期－発生直後から7日間－に必要な知識と技術の習得を中心に、災害医療に関わるスタッフへのメンタルサポートの意義にもふれる内容を盛り込んでいる。

表2 災害サイクルに応じた看護活動

災害サイクル	場所	看護活動
超急性期～急性期 発生直後から7日間	被災現場 病院 救護所	<ul style="list-style-type: none"> ・負傷者の救助と安全地帯への移送 ・初動体制の立ち上げ ・入院患者・スタッフの安全確保、避難誘導準備、被災者の受け入れ、被災地外からの救援者要請 ・Triage/Treatment/Transportation ・遺体の取り扱い
亜急性期～2,3週間	病院 避難所	<ul style="list-style-type: none"> ・重傷者への集中治療・生活環境の整備 ・組織的なこころのケア・感染予防対策
慢性期～1ヶ月	病院 巡回診療 避難所	<ul style="list-style-type: none"> ・救急疾患看護・慢性疾患看護 ・リハビリテーション看護 ・保健指導・感染症対策・こころのケア・自立支援
復興期	地域	<ul style="list-style-type: none"> ・長期的こころのケア ・健康生活支援・地域社会の自立支援

急性期は、災害現場周辺の人的資源による救援が開始される“救出救助期”から72時間の超急性期から、被災地以外の救援が到着し、災害医療支援計画が立案された時期までをさす。災害医療には、救急・外科の治療、3T (Triage. Treatment. Transportation.), こころのケアなどの役割が期待される時期である。そこで、災害看護の概念と構造、災害と健康と看護、災害時の医療、トリアージと救急看護、心理的障害と回復過程、災害医療援助活動の実践が学べるよう組み立てた(表2, 二重線部分)。

急性期における災害救護技術は、①救出・搬送、②救護所環境の整備、③トリアージ、④外傷評価・救急処置技術、

⑤ AEDを含む一次救命処置技術、⑥精神的支援、⑦コンフリクトマネジメント、⑧情報伝達技術である⁷⁾。授業では、救護所環境の整備、搬送、トリアージ、外傷評価・緊急処置技術、AEDを含む一次救命処置技術の5項目が体験できるよう構成している(表3)。

表3 災害看護技術

項目	内容
救護所環境の整備	救護所レイアウト、負傷者数の予測、適切な救護所環境の整備
災害派遣医療チーム	被災状況のアセスメント、役割分担、必要な救護資機材の活用 傷病者の搬送、災害用非常食の調理と配給
トリアージ	机上シミュレーション、模擬患者のトリアージ
外傷評価・緊急処置技術	避けえた死を防ぐ技術
一次救命処置技術	応急救急法 心肺蘇生法(AEDを含む)、止血法と包帯法、固定法、三角巾
精神的支援	観察や処置の際のインフォームドコンセントの原則、傾聴 精神的安寧を図る技術
コンフリクトマネジメント	対立した利害の調整
情報伝達技術	適切な情報収集と正確な伝達

太字が災害看護で実施する内容である

実際の授業は2泊3日の宿泊型とし、外部の災害救護団体所属の実践家の協力を得ながら行っている。授業は、①災害及び災害看護に対する基礎的知識の理解、②災害発生時の社会の適応やしぐみ、個人の備えの理解を中心とする講義と、災害時に必要な技術の習得を目指した演習、実際の災害を想定した実践演習で構成している(表4)。

表4 災害看護の授業計画

1日目	2日目		3日目	
P M 災害看護概論 ・災害看護とは ・災害の概念 災害医療所の役割と活動の実践 ・基礎知識 災害サイクル ・災害種類別・心構え、態度 ・災害マネジメント ・関係各機関の支援体制 ・看護の役割 ・被災者、援助者の心理 演習課題の提示とグループワーク	A M ポスターセッション スキルトレーニング ・外傷評価技術 ・Triage	P M ・一次救命処置 ・応急救急法 ・基礎行動訓練 ・心のケア	A M 実践演習 ・救護所設置 ・無線操作 ・担架搬送 演習準備	P M 総合演習 ・シミュレーション ・医療トリアージ ・応急処置 ・模擬患者の救出 ～収容、後方病院搬送まで 全体評価

具体的な授業の内容は、災害看護では、災害の概念、危機管理の指標、災害の定義、災害時の支援体制、災害サイクルと医療の変化、災害時の看護の役割、医療機関におけるトリアージ、災害に伴う医療機関の混乱、災害時に陥りやすい隠れた危険、避難所での問題、赤十字と災害救護、災害看護の考え方などである⁸⁾。医療救護チームにおける心構えでは、活動時はまず自分の安全確保、チームメンバーの安全確保、その次に要救護者の救命となること、災害時は非日常であり、できることに限界があること、自分の力・自分の傾向をよく知っていること、日頃からの準備の必要性などを教授する必要があると考

えている。また、一人で活動するのではなく、組織としての活動に必要なスキル、他の救護組織（警察、消防、DMAT など）との連携に必要な情報の取り扱いについても体験的に考える機会を設けている。

災害看護演習では、スキルトレーニングとして、5～6人ずつのグループごとにレサシアン（シミュレーション用マネキン）とAEDを配置し、一次救命処置・AED・応用救急法の基本を学ぶ。総合演習は、身近な地域での災害発生をリアルに想定し、実際の負傷時の状況と傷病の程度を設定した事例を作成、グループごとに負傷者のトリアージと、救護所のレイアウトを考えた見取り図を作成するよう指示している。学生は、負傷者ごとにどのような観察や応急処置が必要か、救護所レイアウトの根拠などを模造紙にまとめる。ポスターセッションでは、各グループの発表に対し意見や質問を出し合い、実践演習で設営する救護所のレイアウトを決定する。午後からの実践演習の行動目標を表5に示す。

表5 実践演習の行動目標

1.	災害救護活動における看護専門職としての役割を考える。
2.	基礎行動の必要性が理解する。
3.	救護所設営ができる。 傷病者ごとに必要な物品の配置ができる。
4.	担架操作法の原則を理解し、患者の搬送ができる。 ・担架操作法の原則が説明できる。 ・担架操作ができる。
5.	無線機の操作方法が理解できる。
6.	模擬患者の救護活動が指導の下にできる。 ・対象の観察ができる ・対象に応じた応急処置が原則通りにできる。 ・必要な情報の取り扱いができる ・必要時無線で連絡できる。 ・原則に従い担架操作ができる ・救護班で協力した行動が取れる

II. 研究目的

「災害看護」授業において、宿泊を伴う形態（以下“宿泊形”）で授業を受けた学生の学びの内容を分析し、宿泊形授業の効果を検討する。

III. 研究方法

調査対象：宿泊形で災害看護授業を履修した学生（以下“学生”）が、授業での体験や学び、感想について自由に記載したレポート。分析方法：学生の学びとして意味ある文脈を抽出しラベル化、類似するラベルから表題をつけ、

表題ごとの関連を帰納的に分析し構造化、授業形態の違いによる学生の認識の特徴を検討した。分析の妥当性を高めるために、研究者間で内容の一致を確認した。倫理的配慮：学生には3日間の日程をすべて終了し、単位認定を行った後に研究の目的・方法について口頭にて説明し、研究協力を依頼した。研究協力への同意の有無は成績に関与しないこと、同意の有無による不利益は一切ないこと、自由意思での参加であることを説明、レポートの提出によって研究参加への同意を得たとみなした。データは無記名で取り扱い、個人が特定されないようプライバシーに配慮し、終了後に廃棄した。

IV. 結果

学生は61名であり、51名（回収率79.7%）から研究参加への同意を得た。記述された文章を学びの内容ごとにまとめ、帰納的に分析した結果、宿泊形による効果的な学びと、困難が抽出された。

1) 宿泊形における効果的な学び

学生は、日常から切り離された環境で必然的に講義や演習に集中していった経緯や、授業や演習の構成や講師の姿勢、教材への興味などから授業に主体的に取り組み、授業に向き合えたと捉えており、【集中できる】【真剣になる】【緊張感がある】【厳しさがある】【勉強できる雰囲気】【イメージしやすい】【けじめがある】のコアカテゴリーが抽出された（表6）。日常の生活から切り離され、携帯電話もつながらず、テレビもない環境で否応なしに授業に集中したことで、受講姿勢が変化し、真剣に習得したという雰囲気になったことが読み取れた。さらに、救護される側のみならず救護者の命に関わる知識・技術を学ぶ授業として、真剣かつ緊張感を伴う雰囲気を実感していた。講義形式での授業とグループでの演習、課題遂行する授業構成が学生の学習意欲を徐々に刺激し、学ぶ雰囲気になっていったと感じたことが読み取れた。また、災害による環境の変化を現実的にイメージできたことや、体験を通して理解できたことが講義への向き合い方に影

表6 宿泊形による授業への向き合い方に関する認識

項目	コアカテゴリー
授業に向き合えたと捉えた要因	集中できる（4） 真剣になる（6） 緊張感がある（4） 厳しさがある（3） 勉強できる雰囲気（6） イメージしやすい（4） けじめがある（6）

（）内の数字はカテゴリーの数を示す

響し、救護に必要な技術を学ぶ際のモチベーション作りに影響していたことが読み取れ、宿泊することで講師と長時間過ごし、緊張する時とリラックスする時のメリハリがあると感じ、災害時の精神的なコントロールの必要性が学べていた。

2) 宿泊形における困難

学生が困難だった体験として記憶している場面を分析した結果、【課題が遂行できない】【学びの達成感が実感できない】【グループの力を使えない】【極度の緊張に戸惑う】のコアカテゴリーが抽出された(表7)。提示された課題をメンバーで解決していく際に、自分の役割が見出せない不全感や、メンバー同士の意見の対立や意識の違い、十分に意見を出し合うことができず安易に結論を導いてしまった心残り、メンバー間の人間関係に必要な以上に気を遣い疲弊してしまい、グループがもつ力を引き出すことができなかった体験が読み取れた。また、3日間の学習成果が試されるプログラムに対し、十分に準備できないまま個人の学びの成果が問われる事態への緊張感、個人の責任を問われる事態に不慣れであり、極度に構えてしまったことなどを困難な体験として認識していた。

表7 宿泊形による授業における困難

コアカテゴリー	カテゴリー
課題が遂行できない	動きがわからず混乱(4) 予測できない状況に戸惑う(2) トリアージに悩む(4) 時間の配分ができない(5)
学びの達成感が実感できない	役割が遂行できない(5) 学びを統合できない(3) 満足できない結果に戸惑う(4)
グループの力を使えない	ディスカッションが不十分(3) 意見をまとめるのが困難(5) 人間関係の調整に気を遣う(5)
極度の緊張に戸惑う	同一の動きが苦手(2) 厳しい指導に萎縮(3) 過緊張による疲弊(3) 試されていることが負担(2) 目立ちたくない(3)

() 内の数字はカテゴリーの数を示す

V. 考察

宿泊型における効果的な学びから災害看護の教授法を検討する。

授業を宿泊型とし、集中できる環境で実施することで、

学生は未経験の被災当日の“非日常”をイメージでき、救護に必要な技術を学ぶ際のモチベーション作りに効果があり、授業に対し真剣に向き合えたと考える。一方、学生はテレビやインターネットを自由に使える環境から切り離され、「災害看護」だけに集中せざるを得ない環境に置かれることになり、その結果学生に2つの変化が引き起こされたと考える。

非日常の生活に置かれ、さらに今まで経験の少ない“共同生活”で授業を受けることにに対し、授業開始前はかなりストレスを感じていたことが学生の言葉から窺えた。そのため、不自由な生活に伴う困難が生じると予測していたが、課題遂行に対する困難を感じていたことは、筆者らの予期せぬ結果であった。課題遂行に伴う【課題が遂行できない】【学びの達成感が実感できない】【グループの力を使えない】【極度の緊張に戸惑う】困難は、生活の不自由さから生じたものではなく、災害時に発揮できる知識・技術を習得することへの真摯な願いから生じたものであると考える。

意欲や関心や態度・興味、思考力・判断力・表現力を豊かにする体験が“学んでいる”というエンパワーメントを実感させ、個人個人の内なる気持ちの突き上げによってさらに新しい知識・技術の習得に向け旺盛な学習欲が刺激される⁹⁾ように、教授する側は、学生が備えている力をうまく引き出すために、新しい知識を習得することの喜びが実感できるよう、授業を組み立てることが必要である。

授業開始当初、学生たちは主体的に参加していたとは言いがたい状況であった。しかし、講義開始にあたり、「自己完結」「チームワーク」「自主自律」を中心とした心構えを共有したのみで、学生を大人として扱い、これらの姿勢を理解し対処できる人として信頼しながら学生の変化を待った。また、チームリーダーの指示を正確に受信する、自分が扱う情報を正確に発信するなど、チームにおける指示命令系統の確立、個々の役割を考える、グループの凝集性を深めること等を目的に、コミュニケーションゲームを用いた課題を提示し、問題解決を競う演習では、学生はゲーム感覚で課題に取り組み、チームで回答を導き出す速さを競い、チームで課題解決に集中していった。正解を導き出すという共通の目標を提示することで、メンバー間のコミュニケーションが深まり、情報の送受信スキルを磨く機会となったと考える。その結果、【集中できる】【勉強できる雰囲気】が生じ、さらにグループに貢献したいという気持ちが芽生えたことで“力を尽くす”気持ちが発生したのではないだろうか。また、【真剣になる】【緊張感がある】【厳しさがある】ことで焦りやプレッシャーを感じてしまい、【課題が遂行できない】【学びの達成感が実感できない】【グループの力を使えない】【極度の緊張に戸惑う】など、目標達成への学習意欲が刺激

された結果，“困難な体験”として学生が認知したのではないかと考える。

災害時の看護活動に必要な能力には、判断力・行動力・実行力・リーダーシップ・臨機応変の対応能力・人間関係の調整能力・協調性・主体性があり、心身共に健康であることでストレスに耐えることができる。また、災害看護の教育方法については、講義・演習・訓練を用いることで認知領域・情意領域・精神運動領域の3領域における学びが成立し、災害時に実際に活動できる看護職を養成するために、専門技術の習得はもちろんのこと、災害とそれに伴う健康問題の特徴や他職種との連携など、組織的な動きや体制づくりの必要性を学ぶ教育が必要であるといわれている¹⁰⁾。

学生は、他人事のように感じていた災害に対し、災害は誰にでも平等に起こることを実感し、災害時に取り扱う命の重さと“命”を取り扱う看護師に突きつけられる責任を真摯に受け止めていた。また、課題達成という共通の目標に向かいグループの凝集性が高まり、限られた時間の中で自分の持てる力を最大限に発揮し、授業に積極的に臨む気持ちが芽生えた。これらの結果から、共通の目標が提示され、集団を形成している“個”がその目標を共有することができれば、その中で自分にできる最大限の力を発揮したいと取り組みへの意識が変わり、行動を変容させることができると考える。彼らにこのような力強い側面があることを実感できたことは、うれしい成果であった。

学生は、災害時の看護師の役割や被災者に期待されていること、命を取り扱う責任の重さを実感する体験ができたことで、災害時に役に立てる看護者になりたいという願いが生まれ、学習への興味が湧き、授業への参加態度を変化させていた^{11) 12)}。講師の責務として未知なる力を秘めている若者として彼らを捉えること、彼らのもつ力を引き出し、彼ら自身が授業に参加し興味・関心を育てる授業展開を工夫することが求められていると考える。

災害文化と災害教育システムの構築という立場から、大学における震災教育システムの開発について、災害の教育活動を日常活動の中に取り込むことが重要である¹³⁾といわれている。災害看護教育は、単に知識や情報を頭で理解するだけでなく、日常から非日常に身を置き、実際にスキルを体験できる教育方法を取り入れることで、救急時に活用できる知識・技術の習得に向けた興味関心を育てる手掛かりとしての使命も含まれているのではないだろうか。今後はさらにリスク・アセスメントやリスク・マネジメントに関わる知識・技術の習得はもちろん、リスク・コミュニケーションスキルの開発に向け、地域の専門職種との連携を取り入れながら、授業に組み込んでいくことを検討したい。

災害看護の教育方法については、講義・演習・訓練を

用いることで認知領域・情意領域・精神運動領域の3領域における学びが成立し、災害時に実際に活動できる看護職を養成するために、専門技術の習得はもちろんのこと、災害とそれに伴う健康問題の特徴や他職種との連携など、組織的な動きや体制づくりの必要性を学ぶ教育が必要である¹⁴⁾。

災害看護の授業を体験した学生は、実践さながらの緊迫した演習体験から、急性期災害医療の原則、態度や価値観を、自らの判断と行動とにより学んでいた。さらに、災害に対する意識を高めること、看護師に必要な知識・技術・態度が災害看護にも共通して活用できることを学んでいた¹⁴⁾。災害看護の授業を通し、学生達は災害看護の一連の活動の中に看護独自の機能があることや、看護の普遍的な使命である“生命の尊厳”について学ぶことができるのである。

文献

- 1) 南裕子，山本あい子：災害看護学習テキスト 概論編．日本看護協会出版会，東京，2007.
- 2) 酒井明子，菊池志津子編：災害看護 看護の専門知識を統合して実践につなげる．南江堂，2008.
- 3) 山本あい子：災害看護学教育と意識の災害モードへの切り換え．看護研究，32(3)，1999.
- 4) 南裕子：災害看護学構築に向けての課題と展望，看護研究，32(3)，1999.
- 5) 酒井明子：書籍・研究論文・ガイドラインから学ぶ災害看護．インターナショナルナーシングレビュー，28(3)，2005.
- 6) 前掲書1)
- 7) 澤田由美，武久真輔，中山亜弓：大学看護学部における災害看護の授業展開への試み 第2報 - A短期大学看護学科における実践と学生の認識-，新見公立大学紀要，32，15-22，2011.
- 8) 岩崎信彦，田中泰雄，林勲男，村井雅清編：災害と共に生きる文化と教育．昭和堂，京都府，2008.
- 9) 前掲書1)
- 10) 澤田由美，池本ちひろ：災害看護の授業とその効果．看護教育，48(11)，1002-1007，2007.
- 11) 澤田由美：災害看護学における学生の学びの分析．日本看護学会論文集（看護教育）第38回，240-242，日本看護協会，2007.
- 12) 平野美樹子：「人道」を基盤とした災害看護演習プログラム，看護展望，31(8)，2006.
- 13) 澤田由美，丹下幸子：看護基礎教育における災害看護の授業展開への試み，新見公立短期大学紀要，29(2)，109-114，2008.
- 14) 前掲書6)